

《書 評》

杉原四郎著 『J. S. ミルと現代』

——岩波新書 1980年4月刊——

八 木 紀 一 郎

1

どんなに貴重な思索の成果も、ミルの筆にかかると、新鮮にも刺激的にも感じられなくなる、というようなことを皮肉屋のシュムペーターはどこかで書いている⁽¹⁾。しかし、現代にあつて、たとえば杉原氏のこの小著をきっかけにミルの再読をこころみようとするような人にとってはどうであろうか。評者が以下に述べることもまた、そのように（ミルの専門的研究者としてでなく）ミルを再読した経験にもとづくものである。結論としていえば、まず私はミルの思想あるいは態度のもつ現^{アクチュアリテイ}代性という点に関して杉原氏に完全に賛同する。しかし、私は同時に、わが国の知識人に特有と思われ、杉原氏もそれをぬききっていないようにみえるミル観が存在することに気づき、それに異和感をおぼえた。さらに、私は特にミルの『経済学原理』を読んでいくにつれ、杉原氏がこの小著で描き出す心やさしいモラリストとしてのミルの像に、自らの時代と社会の現実から思考を進めようとした社会学者としての像を補足すべきである、と考えるようになった。この3点を表明することが、この書評の目的である。

杉原氏のミルに対する関心は永年来のものであり、その包括する領域が広範にわたることは、この小著（それぞれ「スミス・ミル・マルクス」「自由と進歩」「自然と人間」「労働と競争」「ミルと日本」と題する講演体の5小篇からなる。）だけからもみてとれる。本書は、たしかに啓蒙的な著作として書かれてはいるが、他面では、氏の多方面にわたるミル

(1) 東畑精一訳、『経済分析の歴史』、岩波書店、1957年、954ページ（第3分冊）。

研究への案内としても読むことができるだろう。この小著をインデックスとすればいわば本文にあたる氏の諸論文にさかのぼることによって、読者は本書への不満の多くを解消されるとき、たとえ意見を氏と異にする場合でも、文献的な研究方法をわが国に定着させようと努力されてきた氏の仕事からは、多くのものを学ぶことができるであろう。⁽²⁾私が先回りして述べた第2点は、日本人のミル受容の歴史や河上肇のミル理解をめぐる経緯についての氏の教示から得られた感想にすぎないし、また第3の点も、社会科学的な問題に対しては、その所在だけを明らかにし、ミルの読み方をアドヴァイスするだけにとどめた杉原氏の思うつぼにはまっただけのこともかもしれない。

しかし、この書評の機会においては、本書の背景をなす氏の諸論文を直接にとりあげることは不可能である。それは、杉原氏によるミルの経済理論の把握についても、直接検討することができないことを意味する。したがって、この書評が、全体として思想史的視角からなされていることは、はじめに断わっておきたい。

2

本書の「あとがき」で著者は、「現在のわが国ではミルへの関心は一般的にいつてけっして高くはない」ので、「なるべくミルという人物に興味をもってもらえそうなエピソードをおこみながら、また現代の世界で大きくクローズアップされてきた問題とかかわらせ」また「マルクスと対比することでミルへの興味をよびおこ」そうとしたと語っている。現代的関心にひきつけてミルを論じることと、ミルをマルクスと対比させること、この2つが本書で著者のえらびとった視点である。

まず、ミルへの現代的関心の方からみていこう。杉原氏はなぜいまミルの思想がかえりみられるのかという問に対して、「ミルがヴィクトリア時代のイギリスで直面した問題、彼が人間にとって今後ますます重要な問題となるであろうことを予告し、警告した問題が、

(2) 杉原氏のミル関係論文の大部分は氏の以下の著者の中に収められている。『ミルとマルクス』(ミネルヴァ書房、1957年、増訂版1967年)、『西欧経済学と近代日本』(未来社、1967年)、『イギリス経済思想史——J・S・ミルを中心として——』(未来社、1973年)、『経済原論I』(同文館、1973年)、『社会科学の道標』(新評論、1979年)、『近代日本経済思想史論集』(未来社、1980年)、『近代日本経済思想文献抄』(日本経済評論社、1980年)。

現在も解決されないままでなお生きた問題として残っている、いないまにいたってますますその切実さをましてきているからです。そしてその問題ととりくむためには、ミルがしたように、問題を個別科学の領域内で処理するのではなく、それを人間観や社会観の深みにまで掘り下げて考えてみる必要があるからです。」(57～58ページ)と述べ、「ミルがかえりみらるべき現代の問題」として「第1はあるべき社会体制の問題、資本主義か社会(共産)主義かという問題」、「第2は、マス・デモクラシーのもとでの個性の喪失という問題」、「第3は、生産力信仰への懐疑であり、人間にとって真の進歩とは何かという問題」の3つをあげる。第1の問題に関して、杉原氏は、社会主義者の主張に対するミルの検討が現在の比較経済体制論の先駆として位置づけられるだけでなく、その検討に際してミルが「どちらが人間の自由と自主性の最大限をゆるすか」を究極的な基準にしようとしたことに現代的意義を見出している。第2の問題は『自由論』の問題であるが、杉原氏はミルが政治の民主的改革、教育の拡張、交通手段の改良、商工業の発展、そして世論の力の登場に、人間の画一化の危険をみてとり、「そもそも個性の権利というものが主張されなければならないとすれば、今こそその時期である」と結論していたことを、資本主義国だけでなく社会主義諸国の現状をも想起しながら、強調している。第3の問題は、ミルにとって予想される「^{ステイショナリイ・ステイト}停止状態」の問題でもあった。ミルは経済成長の持続を追求するあまり自然を破壊しつくしてしまうよりは、むしろこの状態の到来を経済成長の追求から解放された力を人間の進歩のためにふりむける好機とみるべきだ、と考えた。著者はミルの考えに大いに共鳴している。

この3点の問題提起とそれに対するミル的な回答の現^{アクチュアリティ}代性は、私はこれを疑うことはできない。また私は杉原氏のこの3点に対する関心が、年来のものであって昨日今日のものではないことに敬意を表する。

しかし、ミルとマルクスという対比の軸は、このミルへの現代的関心と有機的に結びついているであろうか。上記3つの「現代的問題」に対するマルクスの回答は、この小著の中ではいっとうに明らかでない。一方でたとえば、ドイツ哲学の上になつ批判は根本的である(30ページ)とか、マルクスはエンゲルスのような生産力主義ではないかもしれない(105ページ)といった思わせぶりの記述があると思えば、ミル的な生産論がマルクスを現代に生かすためにも示唆を与える(113ページ)ともいわれるが、ここでの記述も決して明解なものではない。第1の問題に関してのマルクスの態度はもちろん疑問の余地がない

だろう。しかし、社会主義ないしはプロレタリア独裁のもとでの個人の自由の制限の問題にマルクスがどれほど具体的な回答を用意していたかを確言しようという人は、第2、第3の問題に対するマルクスの回答についての場合と同様に、少ないであろう。したがって、これらの「現代的問題」に関して、ミルとマルクスという対比は必ずしも成立していないのである。氏の問題提起は、むしろ、現代のマルクス主義者に、ミル的な問題に誠実に答えるように要請したものであると、私はうけとりたい。

ミルとマルクスの対比が本書においていかなる意味をもつかを考えようとする場合、まず私の関心をひくのは、河上肇のミル論と本書の関係である。(ミルとマルクスという対比の設定は、冒頭から河上肇のミル論の紹介としてあらわれる。終篇の「ミルと日本」にも河上のミル論はでてくる。)河上は1923年の『資本主義経済学史的発展』で、ミルをスミス(「個人主義経済学の創始者」)とマルクス(「社会主義経済学の創設者」)の間に位置づけ、「彼は、個人主義がその極頂に達すると同時に、社会主義が興って来ようとする過渡の時期を代表するに最も適当な学者」である、とみなしていた。(とりあえず、筑摩書房版『河上肇著作集』第三巻、1965年、692ページ参照。)河上は、この書で、「精神の危機」をふくむミルの思想的変遷を当時の社会思想の変化を代表するものとしてとらえ、書を読むには先ず著者の人物を知らなければならないという彼一流のやり方で、ミルの生涯について詳しい紹介を行っている。河上肇は経済の問題を人間の生活や倫理とかかわらせて追求したという点で、著者杉原氏にとってミルにまさるとも劣らない位置をしめているのであるが、この小著においても、こうした河上のミル把握が一方の磁極になっていることは確かであろう。

私はいまま少し、この河上のミル観についてちいってみたい。周知のごとく、河上は利己と利他の対立という自らの根本的テーマを経済思想史の中に投影し、ミルにおける思想の転回 = moral revolution は資本家的個人主義経済学の自己否定を準備し、利他 = 社会主義への過渡期を体現するとみたが、社会主義をこうした道德的視角から位置づけるやり方は、榊田民蔵からの痛烈な批判をうけざるをえなかった。(「社会主義は闇に面するか光に面するか」1924年。今秋新版の出た同題朝日新聞社刊の榊田論文集に収録されている。)河上は、唯物史観は人道史観ではないという榊田の批判をうけられたが、この著作自体自らの過渡期を表現したものとして特別の愛情をもちつづけた。社会主義やマルクス主義を前にして、人道主義的な思想を「過渡期」の思想と位置づけるこのような見方が、戦前の日本の知識

人にどれほどの影響力を及したかは想像するに難くない。

しかし、河上のミル論から半世紀を経た現在、ミルをみる河上的な構図はどれほどの意義を主張しうるのであろうか。杉原氏もこの小著でミルが「過渡期の思想家」であることを力説する。しかし、その「過渡期」というのは「近代から現代へというもっとも大きな意味での過渡期」という茫漠たるものになってしまっている。そして、ミルにとどまるか、それともマルクスにまで行くか、という倫理的な決断を日本の知識人に迫ったミル→マルクスの一直線のコースに代って、現代的問題を前にしてのミルの再発見とマルクス主義に対する課題設定、という錯綜した状態があらわれている。先にみた3つの現代的問題に対するミルの態度を評価するものは、もはや河上的な構図には同調しえないであろう。

私は、こうした経緯自体、わが国での思想史的研究のあり方について、反省を促すところをもっている⁽³⁾と考える。

3

人々の知的道徳的進歩と個性の自由が判断の基準とならねばならない、と主張するミルの態度に現在のわれわれが共感するとしても、それはミル自身の社会科学的現実把握の内容や、またミルの見解の中に反映している時代的・社会的な刻印を知ることの必要性を軽んじるものではあってはならない。ミルを彼の時代の中におき、マルクスとの対比で読むようにという著者のアドヴァイスは、ミルに対するこうした社会科学的理解へのすすめと言えるだろう。こうした観点からミルをとりあげようとするときの中心的な素材は、もちろん『経済学原理』であるが、ミルはここでは社会の進歩を説く彼の思想を経済の現実自体の中に見出される可能性に結びつけようとしている。ミルはけっして社会科学的な現実認識と離れたところで道徳的基準をふりまわす人間ではなかったのである。

(3) 岡田与好氏は『自由経済の思想』（東京大学出版会、1979年）で、専制権力ならざる社会（各階層や勢力、あるいは世論＝多数派）による圧迫に対する個人の自由を擁護したミルの『自由論』が明治期の日本においては、一般には必ずしも正確に理解されなかったことを、明治期の2種の邦訳に即して興味深く叙述している。この時代には、ミル的な問題意識を受容する社会的土壌がそもそも存在しなかったのである。しかし、もしミルのこうした個性擁護の主張や、また他の2つの問題においても貫かれるミル的な基準の重要性が、今多くの人々に共感をもって感得されるとすれば、現在こそがミルを先入見なしに理解しうる土壌が与えられた時代であるといえるだろう。

したがって私は、杉原氏が婦人解放運動、労働運動、土地改革運動へのミルのかわりについて紹介を行いながら、これらの運動の社会経済的な基礎についてのミルの抱え方について説明する筆を惜しまれたことを残念に思う。

まず婦人解放の問題をとりあげるならば、ミルのフェミニストぶりだけでなく、「労働生活をなす婦人の中でその地位が奴隷および苦役者のそれでないものは、ただ工場に雇われている婦人だけである。……婦人の地位を改善するためには、産業における独立的な職に……もっとも容易に就きうのようにするべきである」(末永茂喜訳『原理』岩波文庫五、318ページ)と、ミルが婦人解放の経済的基盤についても十分に認識していたことに触れて欲しい。⁽⁴⁾

次にイギリスの労働運動の可能性についてミルがどう考えていたかも、説明しておいて欲しかった点である。ミルは労働者の各種の協同組織に注目すると同時に、一貫して労働者の団結権の擁護者であった。それは「労働者たちの組合は、決して自由なる労働市場に対する妨害となるものではなく、自由なる労働市場のための方便として必然的なものである」(『原理』五、277ページ)という見方にもとづくものであった。そしてミルは、労働者階級が理性的な努力によって自らの性格と生活状態を改善することが可能になった時代が到来したとみて、「より高い給与を取っている熟練労働者の諸階級」(当時の労働運動指導者はほとんどこの層の出身である。ミルの念頭には合同機械工組合があるのであるが)が他の労働者仲間を排除せず、むしろ彼らの範となり、手を携えて共同の利益をもとめるようにと助言するのである。いいかえるならば、ミルの労働運動に対する認識は、労働組合をも労働市場の円滑な機能のための一因子として容認し、労働者階級の中の新しい階層分化が定着しつつある段階の資本主義をふまえて発言をおこなっているのである。

晩年の土地改革運動については、『原理』には、それと関連するものとしては、次のような文章がある。「経済的な観点からいえば、最良の土地所有制度というのは、土地をもっとも完全に商業の目的物たらしめることである。……ここで考えているのは、もちろん、費用の原因となるだけであって、利潤の源泉とはならぬ、風致のための土地ではない。」

(『原理』五、201ページ) この後段の位置づけも、風致用地の維持は利潤を生まない、と説

(4) この点に触れないかぎりには、ミルのフェミニズムも柳田の表現を借りれば「夫にスネた貴婦人」の議論と同水準ということになろう。

むか利潤を生まない土地が風致用地になると読むかで微妙な差異が生じるが、表面上は風致用地に対しても経済的合理主義に抵触しない記述がされている。「土地保有改革協会」の綱領の内の自然保護の主張がどれだけの現実的意義をもっていたか私は残念なことに全く知らないが、大地主制に対する攻撃は、その後40年以上にわたる「土地問題」(労働をまきこんでの資本の土地所有に対する闘争)の序曲となったのである。

これらの社会運動に対してのミルの立場が決して非現実的なものではなかったことは、その後の歴史からも明らかである。ミルは19世紀中葉におけるイギリス産業資本の達成点を基盤として、労働者によびかけたのである。

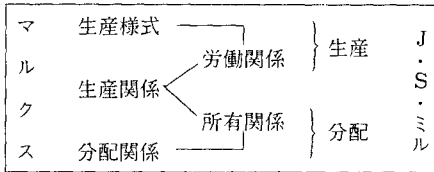
さらに『原理』を読みすすめるにつれて、私はこの小著での杉原氏の叙述に二点の補足をつけ加えたいと思うようになった。

まず第1点は、杉原氏のいう現代の問題の中の第2、民主制と個人の自由の問題に關してである。この問題に關してまず確認しておきたいことは、杉原氏も述べていることであるが、ミルが「社会的専制」の問題を提起したのは、今や、支配者(権力)と人民との間に完全な利害対立を想定することが不適當になっている、いいかえれば、代議制民主主義を通じて支配者(権力)と社会(人民)各層との間に、利害上の、また人間的な共通性が増大しつつある、という彼の時代把握にもとづくものである。こうした時代把握のもとで複雑微妙な問題を包含するようになるのは、政府活動の範囲の問題である。つまり、政府活動はもはや、人々にとり自分と無縁な支配者の活動とはみなしえないのであるから、一義的な態度をとることが困難になるのである。

ミルは「政府の干渉が正当か不当かを慣例上それによって識別する承認された原理はない。」(早坂忠訳「自由論」, 中央公論社『世界の名著49 ベンタム・ミル』, 216ページ)とみる。したがって干渉主義に対する批判も、「利害得失という根拠が有力である場合のほかは、政府の干渉は決して承認すべきではない、という簡単にして漠然たる原則」の慎重な適用にとどまらざるをえないとみる。これは政府の干渉について、個々の領域および事柄ごとに社会科学的な討論の余地をひらく確認点だというべきである。さらに彼は、政府による勧告ないし情報提供、独占権をもたない政府系機関の設立といった非権威主義的な干渉を活用すべきこと、また民衆の間に公共心にもとづいた連帯=共同行動の習慣を養成するように留意すべきことなど、きわめてきめのこまかい議論を展開する。『原理』5篇11章を中心としたミルのこうした議論は、現在でもその価値を失っていないであろう。

第二には、ミルの労働観についての補足である。私はミルが超体制的な性格をもつと考えていた生産・労働が、マルクスの指摘するようにやはり、資本制的な生産関係、それも確立した段階でのそれであったことを確認することは、競争がなければ労働者は必ず怠けるというミルの労働観に対して、ある程度の側面照明を与えるものと考え。

たとえば、ミルが文明人の特質という「協業の能力」とは、「規律に服して、あらかじめ協議決定された（そして彼ら自身はおそらくその相談にあずからなかった）計画をその計画のとおりに行うことができ、個人個人の気まぐれをおさえてあらかじめ決定されたところに従い、自分たちに割り当てられた、共同の事業における分担分をそれぞれ遂行する」こと（『原理』四、14ページ）に他ならない。「協業能力」のこうした把握の上になつ、ミルの分業—協業論は、分業の生産性を素朴に物理的な生産性として叙述したスミスをこえて、バベッジに依拠し、工程分割に対応して労働者を経済的に配分することにより賃金費用を節減する効果（いわゆる シバベッジ原理⁽⁵⁾）を重視するものである。（『原理』一、247ページ）杉原氏がある場所（『社会科学の道標』、147ページ）で提示した次の図がまさにあてはまるのである。こうした分業論や、その他大規模生産論等に目をとおすなら、ミルの生産論はむしろ資本主義下の労働—生産様式自体の中に、その生産力的な制約性と可能性を論じるものであると考えられる。



以上の二点の補足は、杉原氏の叙述した問題にとっての裏面にあたるものである。それが問題自身をより具体的に把握するために役立つなら、この補足の意図は達成されよう。

〔付記〕 本稿は、経済原論研究会の1980年11月の例会（於関西大学）で筆者のおこなった書評をもとにしている。筆者はミルの専門的研究者ではないが、この書評の機会が与えられることにより、著者杉原氏の諸著作を介して、ミル研究から日本経済思想史にいたる豊沃な問題圏に導かれたことについて、杉原氏および同研究会に感謝する。

(5) バベッジ原理の意義については、H・ブレイヴァマン、富沢賢次訳、『労働と独占資本』岩波書店、1978年、第3章参照。この〈労働の経済〉は、A・マーシャルではさらに〈機械の経済〉と結びつく（マーシャル『経済学原理』現行版、第4篇第9章）。